

～要介護になっても・認知症になっても大丈夫～

2019年度 戦略的研究プロジェクトチーム

研究チーム名：自分らしく生きることのできるまちづくり

リーダー：社会福祉学部 教授 小川晃子

サブリーダー：社会福祉学部 教授 齋藤昭彦

分担研究者：佐藤哲郎（社会福祉学部・准教授） 菅野道生（社会福祉学部・准教授）

伊藤隆博（社会福祉学部・講師） 小柳達也（研究地域連携本部・客員准教授）

樽松理樹（ソフトウェア情報学部・准教授） 池田清（研究・地域連携本部・客員准教授）

千田睦美（看護学部・教授） 長谷川高志（研究・地域連携本部・客員教授）

鎌田博之（盛岡赤十字病院・健診部長） 鈴木亮二（東北大学病院臨床研究推進センター・助教）

技術キーワード：見守り、AI/IoT活用、コミュニケーション支援、高齢者の能動性、まちづくり

▼研究の概要（背景・目標）

・要介護や認知症になっても、本人ができること・したいことがまっとうできるよう、環境を整備することが必要となってきた。

・本研究においては、そのための変革（イノベーションの創出）を行うことを目的とするものである。

・本人や家族の意識やリテラシーを変え、支援機器やICT技術の適切な活用につなげ、医療・福祉体制を含めた地域の環境（まちづくり）を一体的に行う。

▼研究の内容（方法・経過）

アクションリサーチ：研究者が地域に介入し、多様な関与者と連携してコミュニティが抱える問題の解決策を見出す

▼研究の成果（結論・考察）

これまでのプロジェクト成果を基盤として、新たな実装への展開を開始した。

1. 重層型見守りからAI・IoT活用見守りへコミュニケーションロボットの研究等。
2. 岩手県と連携した地域協働研究
北いわてにおける生活支援型コミュニティづくり
3. 重度障害者のコミュニケーション支援研修会を県内各地で展開
4. 認知症になってもやさしいまちづくりの推進

結果1

コミュニケーションロボット社会実験

ソニーモバイルコミュニケーションズと共同研究

【社会実験の概要】

- (1) 目的：コミュニケーションロボットを高齢者が活用することの有用性と課題の質的検証
- (2) 方法：以下の4タイプのモニター20名が利用。意見聴取と観察
 - ①在宅の高齢独居・高齢夫婦（家族・県立大見守り）
 - ②在宅の高齢独居・障害者同居世帯（ケアマネ見守り）
 - ③在宅で短時間デイ利用者（デイ職員見守り）
 - ④有料老人ホーム等入居者（家族・ホーム職員見守り）
- (3) 期間：令和元年5月～7月



【XperiaHello!の機能】

- ①高齢者からの調べもの依頼にこたえる
- ②高齢者を個別認識し、話しかける
- ③ロボットとの間で疑似的な会話ができる
- ④別居家族等と音声や動画で交流
- ⑤見守り者が高齢者の滞在状態や室内の様子を確認できる

【効果（仮説検証中）】

- ①高齢者の生きがい感が高まり、会話量が増える
- ②見守る家族の安心感が高まる
- ③福祉専門職等との信頼関係構築
- ④高齢者の異変の早期発見、異変把握の確実性が高まる

結果2 活力ある小集落実現プロジェクト(いわて県民計画)協働

(1) 第4次産業革命技術を活用した日常生活の支援や、世代間交流の促進



住民の日常生活の利便性向上！

(2) 人と人とのつながりを守り、育てる仕組みの構築



▼おわりに（まとめ・今後の展開）

2018年度の成果をさらに推進していく。

1. AI/IoT活用見守り — 介護ロボットの開発や、AIを活用したケアマネ支援システムの開発へ関与
2. 岩手県と連携した地域協働研究 — 北いわてでの生活支援型コミュニティづくり・県内見守り尾体制再整備
3. 重度障害者のコミュニケーション支援 — 特別支援学校や教育委員会等への働きかけ
4. 認知症になってもやさしいまちづくりの推進 — 岩手医科大学・岩手保健医療大学等との連携体制づくり